

## 感染症発生動向調査情報による徳島県の患者発生状況（平成29年）

徳島県立保健製薬環境センター

嶋田 啓司・川上 百美子・飛梅 三喜

Infectious Diseases Surveillance Reports in Tokushima Prefecture in 2017

Keiji SHIMADA, Yumiko KAWAKAMI and Miki TOBIUME

Tokushima Prefectural Public Health, Pharmaceutical and Environmental Sciences Center

### I はじめに

当センターでは、「徳島県感染症発生動向調査実施要綱」に基づく徳島県感染症情報センターとして、徳島県における感染症の発生情報の収集、解析を行っている。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民等に還元し、感染症の拡大防止や公衆衛生の向上に努めている。

今回、平成29年1月から12月までの患者発生状況についてまとめたので報告する。

### II 方法

感染症発生動向調査における患者届出対象疾患は、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により指定されている一類から五類感染症、新型インフルエンザ等感染症の87疾患（全数把握対象疾患）、指定届出機関から届出を受ける25疾患（定点把握対象疾患）とした。

感染症の発生情報は、定点把握対象疾患のうち、内科、小児科、眼科及び基幹定点週報分は、月曜日から日曜日までの週単位で、性感染症定点及び基幹定点月報分は月単位で集計解析を行った。

### III 結果及び考察

#### 1 全数把握対象疾患の届出状況（表1）

##### (1) 一類感染症

一類感染症の届出はなかった。

##### (2) 二類感染症

##### ① 結核

年間届出数は147件で、前年（156件）とほぼ同数であった。平成25年以降、約150件前後のほぼ横ばいで推移してい

る。月別の届出数では、1月（6件）と8月（8件）がやや少なく、4月（20件）がやや多かったものの、その他の月は10～16件で推移し、季節的な特徴は見られなかった。症状別では、「患者」が121件と最も多く、「疑似症患者」は2件、「無症状病原体保有者」は24件であった。届出者を年齢別にみると、60歳未満（34件）では各年齢層ともほぼ10件以下の届出数であったが、60歳を越え年齢が高くなるにつれ大きく増加し、60歳以上が113件と全体の約77%を占めた。性別では、男性67件、女性80件とやや女性が多かった。

年齢別に症状を比較した場合、60歳を境として異なった。すなわち60歳以上では「患者」及び「疑似症患者」が102件（90.3%）と大部分を占めたのに対し、60歳未満では「無症状病原体保有者」が9件（26.5%）、「患者」は25件（73.5%）と若年層ほど「無症状病原体保有者」の割合が高かった。

また職業別では、医療・介護などの施設関係者や学生、教職員等、人と接する機会が多く集団感染に繋がる環境にある者も見られたことより、感染拡大防止のため施設関係者等に対し感染予防啓発、施設内感染対策の徹底が不可欠と考えられた。

#### (3) 三類感染症

##### ① 腸管出血性大腸菌感染症

年間届出数は13件で、過去5年間で最も届出数の多かった前年（17件）からやや減少した。月別の届出数推移では、3月に届出られた1件を除き7～10月に届出られ、患者発生は夏から秋に集中した。年齢別では、10歳未満から80歳代まで幅広い年齢層から報告され、性別では、男性6件、女性7件とほぼ同数報告された。診断の類型では「患者」が7件、「無症状病原体保有者」6件とほぼ同数報告され、血清型別

では本疾患の多くを占める O157, O26, O111 の他に O103, O146 などの血清型も報告された。

「患者」報告例の感染経路や感染源は、潜伏期間が 2～14 日と比較的長いこともあり原因の特定には至らなかったが、全て国内にて感染したと推定された。また、「無症状病原体保有者」の多くは「患者」との接触者検診により報告され、家族内感染と推定された。

#### (4) 四類感染症

##### ① 重症熱性血小板減少症候群

4 件の届出があり、届出月は 6～10 月とマダニの活動時期に一致する春から秋に集中し、年齢及び性別は 40～80 歳代の男性 3 件、女性 1 件であった。感染経路は、多くが農作業などの野外活動時にマダニ等に刺咬され感染したと推定されたが、ウイルスに感染した飼育動物からの感染が推定された例もみられた。

徳島県では本疾患をはじめ、つつが虫病、日本紅斑熱など、原因微生物を保有するマダニ等の刺咬による感染症が毎年のように報告されている。重症化例も見られることより、登山、森林作業、農作業など野外作業機会の多い中高年者を中心に、ダニ・昆虫媒介性疾患に対する予防対策の啓発が重要と考えられた。

##### ② つつが虫病

2 件の届出があり、年齢及び性別は、60 歳代の男性と 50 歳代の女性で、報告月は患者発生報告が多いとされる冬から春先にあたる 1 月と 4 月、県内にて感染したと推定された。

##### ③ 日本紅斑熱

10 件届出られた。過去 5 年間での年間届出数推移は 2～13 件と、年毎により差が大きい。届出月は 4～11 月と、マダニの活動時期にあたる春から秋に集中していた。年齢は 30～80 歳代まで幅広い年齢層から報告され、性別は男性 7 件、女性 3 件であった。感染経路は、重症熱性血小板減少症候群と同様にレジャーや農作業等の野外作業において、ダニに刺咬されたと推察されている。

##### ④ レジオネラ症

平成 26 年以前は毎年 1～3 件の報告数で推移していたが、平成 27 年 (5 件)、平成 28 年 (11 件)、本年 (15 件) と 3 年続けて増加した。年間を通して発生し、季節的な特徴は見られなかった。性別は全員男性で、年齢別では 40～80 歳代まで幅広い年齢層から報告された。病型は全例「肺炎型」で、推定感染経路は水系感染が 5 件、不明 10 件、いずれも国内にて感染したと推定された。

#### (5) 五類感染症

##### ① アメーバ赤痢

3 件の届出があり、性別は全例男性、年齢は 30～40 歳代であった。推定感染経路は性的接触が 1 件、不明 2 件、いずれも国内にて感染したと推定されている。

##### ② ウイルス性肝炎 (E 型, A 型を除く)

2 件届出られた。10 歳代と 40 歳代の女性で、病型は「B 型肝炎」と「サイトメガロウイルス」、1 件は国内、1 件は海外に渡航中感染したと推定された。

##### ③ カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

3 件届出られた。年齢は、30～90 歳代と幅広く、性別は男性 2 件、女性 1 件であった。感染経路は手術部位や医療器具を介しての感染が 2 件、以前からの保菌が 1 件であり、全例国内にて感染したと推定された。

##### ④ 急性脳炎

60 歳代、男性の 1 件が届出られた。これは国内にて感染したと推定され、病原体は「インフルエンザウイルス A 型」が検出されている。

##### ⑤ クロイツフェルト・ヤコブ病

60 歳代、女性の 1 件が届出られた。病型は「孤発性プリオン病」、感染経路・地域は不明であった。

##### ⑥ 後天性免疫不全症候群

5 件の届出があり、年齢は 40～80 歳代、性別はすべて男性、類型は「患者」3 件、「無症状病原体保有者」2 件であった。感染経路は、同性または異性間での性的接触が 3 件、不明 1 件については国内で感染したと推定され、残り 1 件は、国外での輸血により感染したと推定された。

現在、保健所等を中心に利用者の利便性に配慮した無料検査・相談体制が実施されている。本年、届出られた 5 件のうち 1 件は、県内保健所で実施された無料検査にて診断、報告された。今後もハイリスク層や発生報告の多い 20～50 歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、より積極的な普及啓発を推進し、HIV 感染の早期発見による早期治療と、感染拡大の抑制に努めることが重要と考えられた。

##### ⑦ 侵襲性インフルエンザ菌感染症

70 歳代の男性及び 80 歳代女性の 2 件が届出られた。いずれも国内にて感染したと推定された。

##### ⑧ 侵襲性肺炎球菌感染症

6 件の届出があり、年齢は 5 歳未満の 1 件以外は 60～80 歳代、全例男性で、国内にて感染したと推定された。

##### ⑨ 水痘 (入院例)

20 歳代と 50 歳代の男性、2 件の届出があった。いずれも国内にて感染したと推定された。

##### ⑩ 梅毒

平成 27 年以前は毎年 2～3 件の届出数で推移していたが、

平成 28 年は 11 件、本年は 14 件と 2 年続けて増加した。年齢別では、60 歳以上の高齢者が 2 件見られたものの、10～40 歳代が 11 件と若年層に多く、性別では男性 9 件、女性 5 件と男性がやや多かった。感染地域は、全例国内で感染したと推定されている。

現在、我が国では若年層を中心に梅毒患者の増加が大きな問題となっている。HIV と同様に、発生報告の多い 10～40 歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、感染者及びパートナーと共に積極的な感染予防啓発が重要と考えられた。

表 1 全数把握対象疾患の届出数

類型	疾病名	平成 29 年	前年
二類	結核	147	156
三類	腸管出血性大腸菌感染症	13	17
四類	重症熱性血小板減少症候群	4	8
	つつが虫病	2	2
	日本紅斑熱	10	6
	レジオネラ症	15	11
五類	アメーバ赤痢	3	4
	ウイルス性肝炎 (E 型, A 型を除く)	2	1
	カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症	3	5
	急性脳炎	1	3
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1	0
	後天性免疫不全症候群	5	6
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	2	2
	侵襲性肺炎球菌感染症	6	4
	水痘 (入院例)	2	0
	梅毒	14	11
	破傷風	3	2

#### ⑪ 破傷風

3 件届出られた。年齢は 20～70 歳代の男性で、感染経路は創傷感染、国内にて感染したと推定されている。

## 2 定点把握対象疾患 (週報) の動向 (表 2)

### (1) 内科, 小児科定点

#### ① インフルエンザ (鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)

年間報告数は 10,178 件であり、前年 (9,808 件) よりやや増加した。本年の前期流行は、例年とほぼ同じ第 50 週に流行期入りした後、6 週連続で報告数が増加しピーク (40.5 件/定点) を迎えた。ピークの高さは前年 (32.2 件/定点) より高かったものの、報告数が注意報レベル (10 件/定点) を超えた期間 (第 1～8 週) は、前年 (第 4～13 週) と比べ短かった。後期流行については、例年より約 2 週早い第 48 週に流行

開始の目安とされる 1.0 件/定点を超え、流行シーズンを迎えた。

年齢層別報告数では、4 歳以下 17.6%、5～9 歳 27.4%、10～14 歳 16.1%、15～19 歳 5.5%、20 歳以上 33.4%であり、前年と比較して 5～9 歳の割合が低く、20 歳以上の割合が高かった。

### (2) 小児科定点

#### ① RS ウイルス感染症

年間報告数は 2,044 件であり、前年 (1,976 件) よりやや増加した。本疾患は、インフルエンザに先行し、主に秋から冬にかけて流行する。本年の前期流行は、前年の後期流行を継続したまま、第 5 週まで報告数の高い状態が続いた。後期流行は、例年より約 2 ヶ月程度早い第 30 週頃 (7 月下旬) より報告数が増加し始め、第 33 週以後急増しピーク (第 39 週: 9.3 件/定点) を示した。以降、報告数は減少したものの流行期間は長く、全国平均を上回る報告数のまま越年した。

本疾患は 2 歳までの乳幼児からの報告が多く、本年の年齢層別報告数でも、0 歳 30.8%、1 歳 38.5%、2 歳 18.5%、3 歳 6.8%、4 歳以上 5.4%であり、前年と同様に 2 歳以下の乳幼児の割合が大半 (約 88%) を占めた。

#### ② 咽頭結膜熱

年間報告数は 718 件であり、前年 (448 件) の約 1.6 倍に増加した。本疾患の流行パターンは、4 月ごろから報告数が増加し始め、7～8 月にピークを示した後、秋にも小規模な流行が見られる年もあるとされる。本年も 4 月下旬頃より報告数が増加し始め、第 24 週にピーク (1.57 件/定点) を示した。以降、やや減少したものの例年と比べ高く推移し、県内一部の地域での地域流行等により第 35 週と第 49 週に小さなピークが見られるなど、報告数の高いまま越年した。

年齢層別報告数は、1 歳以下 33.6%、2～3 歳 32.9%、4～5 歳 22.4%、6～7 歳 5.3%、8 歳以上 5.8%であり、5 歳以下が約 89%を占めた。

#### ③ A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間報告数は 2,229 件と、前年 (1,347 件) の約 1.7 倍に増加した。本疾患は、冬季および春から初夏にかけて報告数が増加するとされる。本年も、年当初からゆるやかに増加し第 23 週 (6 月初旬) にピーク (4.3 件/定点) が見られた。その後、減少したものの第 43 週頃より再び増加傾向を示すなど、流行が見られなかった前年、前々年と比べ、年間を通して報告数の高い状態が続いた。

年齢層別報告数は、0～1 歳 4.4%、2～3 歳 17.9%、4～5 歳 32.1%、6～7 歳 23.5%、8～9 歳 11.4%、10～14 歳 7.8%、15 歳以上 3.0%と、学童期小児の割合が高かった。

#### ④ 感染性胃腸炎

年間報告数は6,737件であり、前年(9,708件)から大きく減少した。本疾患の流行パターンは、初冬から増加し始め、12～1月頃に一度ピークが見られた後、春にもう一つなだらかなピークを示すことが多い。本年の前期流行は、前年の後期流行に続き第3週頃までは報告数が多かったものの、以降は緩やかに減少した。後期流行は、例年より約2週間程度早い10月中旬(第40週)から報告数が増加し始め、前年の後期流行のようなピークはみられなかったが、増加傾向を示したまま越年した。

年齢層別報告数は、0～1歳 27.2%、2～3歳 23.2%、4～5歳 15.5%、6～7歳 9.6%、8～9歳 6.8%、10～14歳 9.5%、15歳以上 8.2%と5歳以下の乳幼児が全体の約66%を占めた。

#### ⑤ 水痘

年間報告数は352件と、前年(300件)からやや増加した。本疾患は年間を通して発生するが、主に冬から春にかけて流行し、夏から初秋は減少するとされる。本年も年間を通して報告され、11月下旬に県内一部の地域において地域流行などみられたものの、大きなピークは見られず、年間を通じて低い報告数(1.0件/定点以下)のまま推移した。

年齢層別報告数は、0～1歳 8.0%、2～3歳 19.0%、4～5歳 30.4%、6～7歳 18.2%、8歳以上 24.4%と7歳以下の報告が全体の約76%を占めた。

#### ⑥ 手足口病

年間報告数は2,041件と、流行が見られなかった前年(332件)の約6倍に増加した。本疾患は夏に流行する代表的な感染症であり、例年7～8月にピークを迎える。本年も、5月下旬頃より報告数が増加し始め、第25週から急増し、第29週(7月中旬)にピーク(10.8件/定点)が見られた後、緩やかに減少した。年間を通して低い報告数(1.0件/定点以下)で推移した前年と比べ、6月中旬から10月下旬頃まで長い期間流行が続いた。

年齢層別報告数は、0～1歳 47.2%、2～3歳 34.7%、4～5歳 12.5%、6～7歳 2.9%、8歳以上 2.6%であり、5歳以下からの報告が全体の約94%を占めた。

#### ⑦ 伝染性紅斑

年間報告数は92件と、前年(343件)から大きく減少した。本疾患は、年始頃より7月上旬にかけて増加するが、流行の小さい年は季節性が見られないことが多い。本年は年間を通し、多少の増減を繰り返しながら0.26件/定点以下の低値で推移した。ピークや季節的な変動も示さず、地域流行も見られなかった。

年齢層別報告数は、0～1歳 15.2%、2～3歳 18.5%、4～5

歳 42.4%、6～7歳 15.2%、8～9歳 3.3%、10歳以上 5.4%と、2～7歳の幼少児での割合が高かった。

#### ⑧ 突発性発しん

年間報告数は858件であり、前年(798件)からやや増加した。本疾患は、季節性も年次推移も認められず、年間を通じてほぼ一定の範囲内をスパイク状の増減を繰り返しながら推移するとされる。本年もピークは示さず、大きな季節的変動も見られないまま、報告数は一定の範囲内(0.3～1.2件/定点)で推移した。

年齢層別報告数は、0～1歳 70.9%、2～3歳 12.5%、4～5歳 5.1%、6歳以上 11.6%と、1歳以下が最も多く報告され、3歳以下で大半(約83%)を占めた。

#### ⑨ 百日咳

年間報告数は11件と、前年(30件)から減少した。本年も昨年同様、季節的变化は見られず、報告数は一定の範囲内(0～0.04件/定点)で推移した。

年齢層別報告数では、0～1歳 45.5%、2～3歳 9.1%、4～5歳 9.1%、10～14歳 18.2%、20歳以上 18.2%であった。報告数が少ないため単純に比較することはできないが、前年と比べ3歳以下の乳幼児の割合が増加していた。

#### ⑩ ヘルパンギーナ

年間報告数は687件と、前年(876件)から減少した。本疾患は、手足口病とともに主に乳幼児の間で流行する夏期の代表的な感染症である。本年は、6月初旬(第22週頃)より報告数が増加し始めたものの、増加は緩やかであり、前年より約2週間遅くピーク(第29週 4.7件/定点)を示した。

年齢層別報告数では、1歳以下 41.8%、2～3歳 36.2%、4～5歳 16.4%、6～7歳 2.9%、8歳以上 2.6%であり、5歳以下の乳幼児が約94%を占めた。

#### ⑪ 流行性耳下腺炎

年間報告数は817件と、平成23年以来6年ぶりの流行年となった前年(1,399件)から減少した。本疾患は年間を通して発生するが、晩冬から春にかけて報告数が増加するとされる。本年は、前年の流行を継続し年当初から3月下旬頃まで報告数のやや高い状態が続いた後、緩やかに減少した。また、45週(11月上旬)から年末にかけて、県内一部において地域流行も見られたが、季節的な特徴も見られず、年間を通し一定の範囲内(0.2～1.4件/定点)で推移した。

年齢層別報告数は、1歳以下 2.7%、2～3歳 16.5%、4～5歳 37.5%、6～7歳 24.7%、8～9歳 9.2%、10歳以上 9.5%であり、4～7歳の幼小児からの報告数が約62%を占めた。

#### (3) 眼科定点

##### ① 急性出血性結膜炎

表2 内科, 小児科, 眼科定点報告対象疾患の週別報告数

週	期間	インフルエンザ	RSウイルス 感染症	咽頭結膜熱	A 群溶血性レンサ球菌 咽頭炎	感染性胃腸炎	水痘	手足口病	伝染性紅斑	突発性発しん	百日咳	ヘルパンギーナ	流行性耳下腺炎	急性出血性結膜炎	流行性角結膜炎
1	1/2~	372	33	10	12	170	12	8	4	17		2	21		
2	1/9~	532	28	8	19	183	8	12	4	13	1	1	23		1
3	1/16~	1,112	29	9	29	181	5	8	5	11	1	1	15		1
4	1/23~	1,500	25	4	28	127	3	6	6	6	1		18		
5	1/30~	1,336	23	15	32	138	4	4	3	13			15		1
6	2/6~	895	4	12	26	114	1	4	1	13			19		
7	2/13~	725	4	9	41	117	5	6	1	9			18		1
8	2/20~	419	14	5	28	106	3	3		20	1		18		
9	2/27~	333	12	9	49	108	3	1	3	10		1	24		2
10	3/6~	271	8	8	60	104	3	1	2	8			19	1	
11	3/13~	209	4	8	43	101	8		1	13			22		
12	3/20~	164	3	10	54	94	3	2	1	15			13		
13	3/27~	136	5	3	35	101	1			17			32		
14	4/3~	107	11	6	31	135	2			13			22		
15	4/10~	83	12	4	29	155	1	1	4	9			28		2
16	4/17~	68	11	15	43	162	5		5	10		1	15		3
17	4/24~	60	14	6	53	113	4	1	2	11			19		1
18	5/1~	60	7	7	35	125	5	2	3	13			8		
19	5/8~	26	10	7	57	131	7	6		22	1	2	14		
20	5/15~	11	2	17	76	149	4	12		27		6	14		2
21	5/22~	4	5	20	67	142	11	7		18		6	15		
22	5/29~	5	6	31	63	110	7	12		16		25	22		
23	6/5~	2	3	20	99	154	5	22		25	1	19	13		
24	6/12~	2	4	36	93	163	1	25	1	15		37	11		1
25	6/19~	2	4	20	61	116	4	22	5	20	1	18	16		
26	6/26~		3	22	76	170	4	69	5	26		38	22		
27	7/3~	1		10	56	89	8	79	3	19		29	19		
28	7/10~	1	1	16	47	142	3	167	6	16		69	12		
29	7/17~	4	8	13	30	125	4	249	5	24		107	12		
30	7/24~	1	13	20	29	128	8	178	1	15		78	8		1
31	7/31~	5	29	17	46	132	2	163	3	18		55	8		3
32	8/7~	18	51	24	30	130	9	129	1	26		51	9		3
33	8/14~	3	57	21	21	107	5	91		12		24	13		
34	8/21~	15	106	17	22	98	11	105		20		38	14		1
35	8/28~	19	184	30	26	107	8	61	3	13		26	6		3
36	9/4~	8	154	18	26	94	1	42	1	20	1	6	16		2
37	9/11~	2	213	13	40	88	5	58	1	18		10	15		2
38	9/18~	1	164	13	32	71	8	41	2	17		4	6		1
39	9/25~	1	151	8	36	97	7	42	1	14		7	19		1
40	10/2~		118	4	23	57	11	32	2	17	1	6	21		1
41	10/9~	1	73	7	22	79	6	32	2	20	1	4	5		
42	10/16~	2	54	6	28	85	12	22	1	18			22		4
43	10/23~		71	5	26	101	10	43		15	1	3	9		
44	10/30~	1	53	9	37	100	6	22		19		6	8		1
45	11/6~		38	15	45	142	12	32		20			22		1
46	11/13~		33	17	66	176	20	24		19		1	6		1
47	11/20~	24	28	15	32	178	13	30		24		1	14		
48	11/27~	70	30	15	51	194	26	26		11		1	13		
49	12/4~	153	39	27	51	178	6	39	2	19			15		
50	12/11~	296	35	21	64	152	13	33		16			18		3
51	12/18~	401	22	21	56	181	12	40		19			10		
52	12/25~	717	35	15	48	237	7	27	2	19		4	21		
合計		10,178	2,044	718	2,229	6,737	352	2,041	92	858	11	687	817	1	43

年間報告数は1件(40歳代)であった。過去5年間でも毎年0~1件で推移し、徳島県内での流行は見られていない。

② 流行性角結膜炎

年間報告数は43件と前年(30件)からやや増加した。季節的な特徴は見られず、年間を通して1.0件/定点以下の低値で推移した。

年齢層別報告数は、10歳未満18.7%、10歳代4.7%、20歳代11.6%、30歳代27.9%、40歳代16.3%、50歳代7.0%、60歳以上13.9%と幅広い年齢層から報告された。

(4) 基幹定点

① 細菌性髄膜炎

本年は報告が見られなかった。過去5年間では、毎年1~3件で推移している。

② 無菌性髄膜炎

年間報告数は2件(10歳代、20歳代)であり、1件からマイコプラズマが検出されている。過去5年間では、毎年1~9件で推移している。

③ マイコプラズマ肺炎

年間報告数は13件と、前年(57件)から減少した。本疾患は年間を通して発生するが、秋から冬にかけて多くなるとされる。本年も季節的な特徴は見られず、年間を通して0~0.43件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数は、5歳未満38.5%、5~9歳23.1%、20歳以上38.5%と、幅広い年齢層から報告されたものの、10歳代からの報告はなく、学童期を含む10歳未満からの報告数(約62%)が他の年齢層に比べ多かった。

④ クラミジア肺炎

本年は報告が見られなかった。過去5年間では、毎年0~3件で推移している。

⑤ 感染性胃腸炎(ロタウイルス)

年間報告数は12件と、前年(58件)から減少した。例年、年当初から春先にかけて多く報告され、夏季は減少するなど季節的な特徴も見られたが、本年は、年間を通して0~0.29件/定点の低値で推移した。

年齢層別報告数は、5歳未満50.0%、5~9歳50.0%であった。

3 定点把握対象疾患(月報)の動向

(1) 基幹定点(表3)

薬剤耐性菌感染症の総報告数は、平成24年以降大きな変化はなく毎年350件前後で推移していたが、前年(291件)から減少し、本年は275件報告された。

① メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

年間報告数は269件(男性164件、女性105件)であり、

前年(283件)からやや減少した。月別報告数では、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は見られず、年間を通じて報告された。

年齢別報告数は、10歳未満12.3%、10歳代2.6%、20歳代0.7%、30歳代4.5%、40歳代3.0%、50歳代5.6%、60歳代13.4%、70歳以上58.0%と、60歳を超え年齢が高くなるにつれ大きく増加した。

表3 基幹定点(月報)報告対象疾患の月別報告数

	メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感 染症	ペニシリン耐性 肺炎球菌 感染症	薬剤耐性緑膿菌 感染症
1月	28	2	
2月	22		
3月	22		
4月	19	1	
5月	22		
6月	28		
7月	31		
8月	21		
9月	23	1	
10月	18		1
11月	16	1	
12月	19		
合計	269	5	1
前年	283	7	1

② ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

年間報告数は5件(男性4件、女性1件)と、前年(7件)とほぼ同数報告された。

年齢別報告数では、60歳代20.0%、70歳以上80.0%と、60歳未満から報告は見られなかった。

③ 薬剤耐性緑膿菌感染症

年間報告数は前年に続き1件(男性、30歳代)であった。過去5年では、毎年5件以内の届出数で推移している。

(2) 性感染症定点(表4)

性感染症の総報告数は677件と、前年(710件)からやや減少した。男女別では、男性383件(前年375件)、女性294件(前年335件)と、男性は前年と変化なかったが、女性の報告数が減少した。

① 性器クラミジア感染症

年間報告数は267件と、前年(272件)とほぼ同数報告された。月別報告数でも、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は見られず、年間を通じて報告された。男女別では、男性203件(前年201件)、女性64件(前年71件)と、男性、

女性とも前年と変わらず、全体では男性（約 76%）が多くを占めた。

年齢別報告数では、10 歳代 3.7%、20 歳代 42.7%、30 歳代 31.5%、40 歳代 15.0%、50 歳以上 7.1%と、20～40 歳代からの報告が多かった。

表 4 性感染症定点報告対象疾患の月別報告数

	性器クラミジア 感染症	性器ヘルペス 感染症	尖圭 コンジローマ	淋菌 感染症
1 月	20	29	6	4
2 月	26	21	4	5
3 月	18	22	8	1
4 月	15	21	4	6
5 月	22	28	6	6
6 月	21	34	4	3
7 月	21	23	4	4
8 月	20	24	5	4
9 月	16	15	5	3
10 月	29	24	9	9
11 月	24	21	5	10
12 月	35	23	5	5
合計	267	285	65	60
前年	272	300	86	52

#### ② 性器ヘルペスウイルス感染症

年間報告数は 285 件と、前年（300 件）と大きな変化はなく、月別報告数推移でも、月毎に増減はあったものの季節的な特徴は見られず、年間を通じて報告された。男女別では、男性 69 件（前年 67 件）、女性 216 件（前年 233 件）と、男性、女性とも前年と変わらなかった。また性感染症全体では男性が女性より多く報告されているが、本疾患は女性が約 76%を占めるなど、女性の割合が他の疾患に比べ高かった。

年齢別報告数は、10 歳代 1.5%、20 歳代 21.4%、30 歳代 20.0%、40 歳代 20.0%、50 歳代 14.0%、60 歳代 13.0%、70 歳以上 10.2%と、20～40 歳代がやや高かったものの、幅広い年齢層から報告された。また、60 歳以上の高齢者からの報告数が 23.2%と他の性感染症と比較して多い傾向が見られたが、潜伏していたウイルスによる再発の可能性も考えられる。

#### ③ 尖圭コンジローマ

年間報告数は 65 件と、前年（86 件）からやや減少した。男女別では、男性 57 件（前年 59 件）、女性 8 件（前年 27 件）と、前年と比べ女性の報告数が減少し、全体では男性（約 88%）が多くを占めた。

年齢別報告数は、20 歳代 23.1%、30 歳代 43.1%、40 歳代 18.5%、50 歳代 12.3%、60 歳以上 3.1%と、他の年代に比べ

20～40 歳代からの報告が多く、全体の約 85%を占めた。

#### ④ 淋菌感染症

年間報告数は 60 件と、前年（52 件）からやや増加した。平成 24 年（19 件）以降、緩やかに増加している。男女別では、男性 54 件（前年 48 件）、女性 6 件（前年 4 件）と性器クラミジア、尖圭コンジローマと同じく男性からの報告が多く、約 90%を占めた。

年齢別報告数は、20 歳代 40.0%、30 歳代 30.0%、40 歳代 16.7%、50 歳代 13.3%であった。他の性感染症と同様に、20～40 歳代の割合が高く、全体の約 87%を占めた。

## IV まとめ

平成 29 年の感染症発生動向調査に基づく患者発生状況について動向をまとめた。

全数把握対象疾患では「結核」が最も多く、全体の約 2/3 を占めた。年間届出数は、平成 25 年以降、ほぼ横ばいで推移し、月別届出数から季節的な特徴は見られなかった。年齢別では 60 歳以上の高齢者の割合が高く、性別では「女性」がやや多かった。年齢別に症状を比較した場合、60 歳以上では 9 割以上が「患者」「疑似症患者」であったのに対し、60 歳未満では「無症状病原体保有者」が約 1/4 を占めた。また届出者の職業別において、医療・介護などの施設関係者や学生、接客業等、人と接する機会の多い者も見られたことより、施設関係者に対する感染予防、施設内感染対策の徹底が重要と考えられた。

「腸管出血性大腸菌感染症」は、平成 24 年 6 月の厚生労働省通知による牛生レバーの提供禁止以降減少したものの、依然、夏から秋季に集中して報告されている。感染拡大を防ぐため、手洗い・消毒の徹底、食品の十分な加熱及び衛生的な取り扱いなど予防啓発をしっかり行っていきたい。

「重症熱性血小板減少症候群」や「日本紅斑熱」、「つつが虫病」などマダニ等の刺咬による感染症が、野外作業機会の多い中高年者を中心に多く報告された。ダニ・昆虫媒介性疾患に対する正しい知識の普及とともに、予防対策の啓発も重要と考えられた。

近年、全国的に「梅毒」の届出が増加傾向にあり、徳島県においても 2 年連続で増加した。「後天性免疫不全症候群」と共に、20～40 歳代を中心とした幅広い年齢層に対し、感染者とそのパートナーに対し、より積極的な感染予防啓発の推進が重要と考えられた。

定点把握対象疾患（週報）では、冬から春先にかけて「インフルエンザ」、「感染性胃腸炎」が流行し、春から初夏にかけては「A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎」が多く報告された。

夏風邪の代表とされる「手足口病」は2年ぶりの流行年となったが、「ヘルパンギーナ」の増加は緩やかであった。「RSウイルス感染症」は、例年より流行開始時期も早く5年続けて流行し、「流行性耳下腺炎」、「咽頭結膜熱」の地域流行も見られた。

眼科定点報告疾患、基幹定点報告疾患については、前年と傾向は変わらず年間を通じて報告数は低値で推移した。

定点把握対象疾患（月報）の基幹定点報告疾患である薬剤耐性菌感染症については、総報告数に大きな変化は見られず

「メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症」が大半を占めた。また、性感染症定点報告疾患について総報告数は前年からやや減少したが、男女別報告数は前年と同様に男性からの報告が多かった。報告数の多い20～30歳代の男性を中心に引き続き予防啓発を行うとともに、10歳代の若年者に対する予防教育も重要と思われた。

今後も引き続きデータの集積を行い感染症の発生動向に注意していくとともに、迅速かつ適切な情報提供を行ってきたい。